

西本願寺本『教行信証』の本文整理

富 島 信 海

はじめに

本稿は、西本願寺本『教行信証』における本文整理について検討し、書写本としての意義を問うことを目的とする。

西本願寺本は、同系統本の奥書や筆跡などによって文永十二年（一二七五）、親鸞没後の書写と推定され、古くから「清書本」と称されてきた。従来の研究によれば、西本願寺本の書誌的特徴は次のようである。すなわち、①一筆で書され坂東本の前後期筆跡を忠実に書写し編輯する、②現行の全ての文を備え独自の標挙も存在する、③整然とした体裁を保ち、経典・論書・釈書の引用や御自釈に適宜改行し、内容を熟知して長行や偈文を区別する、④本文は墨、右左の仮名や返点、頭註等の註記・補記、四声点等のほとんどを朱筆で記入する、といった点である。⁽¹⁾西本願寺本は何らかの構想をもって書写されたと考えられるが、書写目的については周辺資料による推定に留まり、必ずしも明確でない。西本願寺本書誌

の諸要素を分類・分析した上で、その総体として書写の実態を捉える必要があり、殊に坂東本と西本願寺本の差異について体系的に把握することが現状の課題である。

そこで、体裁面に並んで重要な、朱墨による書き入れについて注目する。朱書については、重見一行氏の研究がある。坂東本に対する西本願寺本の補訂については、六つの場合が想定され、異本については、坂東本を書写した西本願寺本は、「イマ本」と一致する「専修寺本的写本」を中心としつつ補訂したが、「イ本」と示した例が坂東本に悉く存しているという矛盾があるという。⁽³⁾そこで、本文書写の実態と異本の関係を再考し、朱を中心とする書き入れの意味について分析する。

具体的には、鎌倉三本（坂東本・西本願寺本・専修寺本）の比較検討であって、今回は『涅槃経』引用箇所を研究対象の中心としたい。『涅槃経』は『教行信証』において最も引用数の多い経典であり、⁽⁴⁾親鸞真蹟の書写本も多く残る。⁽⁵⁾坂東本では信巻別序前（真蹟集成一五六頁）に『涅槃経』抄出文があり、

中期筆跡時に貼紙が付加され（真仏土卷、真蹟集成四三二頁）、後期筆跡時には信卷書改などが施される。専修寺本では引用前に改行が多くある。西本願寺本にも多く異本情報が示される。このように、『教行信証』としても、古写本の書誌としても、特色があると認められる。

『涅槃経』引用箇所を中心として本文とその他書き入れの実態を分析することを通して、西本願寺本が坂東本から整理・発展する過程で、より「読む」ことを重視した書写本として成立したことを示していく。

本文書写と異本

西本願寺本本文の漢字は、墨書で書写されている。大部分は坂東本と相異無い。西本願寺本の特徴としては、次のことが挙げられる。第一に誤字の訂正（縮刷本一七八頁、「浄」の上書訂記等七例）、第二に字形の相似による誤写（同三九二頁、「婆」を「波」と誤写するなど三例）、第三に専修寺本と共通する坂東本との相異（同三六八頁、「知」を「智」と書写するなど八例）であり、その他（縮刷本三八二頁「以殺壽命彼故」、同四〇二頁「遇火」独自の文も含まれている。自身による誤字・誤写のほか、別の意図をもって坂東本から改めた箇所がある。

次に、異本情報については、「アル本」、「イマ本」、「イ本」と示す他、異本指示の無い註記もある。

西本願寺本『教行信証』の本文整理（富 島）

教卷下欄の「道^{アル本ニコロノ字}」（縮刷本一五頁）とは、「導」に対する註記であり、専修寺本本文（二六頁）では、「道」に「寸」と小さく追加されている。化身土卷『涅槃経』頭註に「在本ニハアリ楽字」（同七四六頁）と漢字表記されており、手元にあることを意味している。

信卷『涅槃経』に多い「イマ本」は、例えば坂東本本文を書写した「言」に対する西本願寺本の右傍註記「云^{イマ本}」（縮刷本二八八頁）などであり、専修寺本（二三〇頁）では「云」となっている。「今本」（縮刷本四〇八頁）と記されるものが二箇所あって、現在目の前にあることを示している。

「イ本」については、坂東本に存するものもあるが、親本である坂東本を異本とすることは難しい。墨書による異本情報には、「耆^キ」（縮刷本四二六頁）、「往^イ」（同四二八頁）があるが、北本（大正一二・五六五中）・南本（大正一二・八一一中）に「耆」、北本（大正一二・五六五中）・南本（大正一二・八一一下）に「往」とあり、『涅槃経』と一致する。『教行信証』諸本のみならず、引用原典との照合が課題である。

異本指示の無い註記についても、専修寺本あるいは『涅槃経』原典と一致する場合が多い。専修寺本と対照すると、「燥^{サウ反}」（縮刷本三七〇頁上欄）は「燥^{サウシ}」（専修寺本二九七頁）、「刪^{セン}」（三七七頁上欄）は「刪^{セン}」（専修寺本三〇三頁）、「舎離^{シヤリ}」（縮刷本三九二頁下欄）は「舎離^リ」（専修寺本三一五頁）、「実得」（縮刷

西本願寺本『教行信証』の本文整理（富 島）

本三九一頁右傍）は「実得」（専修寺本三二六頁）、というように、専修寺本とよく一致している。

なお、『涅槃經』引用箇所以外にも十二例の異本情報がある。右訓などの「イ本」が専修寺本と一致する場合もあり、「イ本」は坂東本の書写原本を含む『涅槃經』文と想定される。異本指示の無い註記については、専修寺本とともに書写していないものも見受けられる。調卷上の問題などによって、坂東本から整理されたと考えられるが、坂東本からの展開として「専修寺本の写本」など数本との照合を行っていた。

以上から、「今本」「在本」は手元で校正するための「専修寺本の写本」、「イ本」は『教行信証』諸本に限らず、坂東本の書写原本を含む原典の可能性が想定される。

朱書部分の「読む」要素

本文整理の要素としての大きな特徴は、朱書による諸情報の付加である。西本願寺本の朱書の種類は、引文に関わるものに願文や成就の傍註や朱註「∴」「∵」「∴」「∵」があり、字義に関する註記、右訓・左訓・返点・合符・句切り点・読点などの訓点、音を示すための字音や字音註・声点などの書き入れがある。字義・訓点・字音については、基本的には坂東本の情報を保存しているが、付加している数が圧倒的に多い。坂東本を底本とし、西本願寺本を対校本とする『浄土真宗聖

典全書』第二卷宗祖篇上（本願寺出版社、二〇一一）所収の『教行信証』の校異を眺めれば、左訓の校異が大部分を占めることが容易に分かる。

以下では、幾つかの場合に分けて例示することで検討を進めていきたい。

まず、坂東本右訓の変更である。「故」を「故」（縮刷本二八五頁）、「言」を「言」（縮刷本二八六頁）、「云何」を「云何」（縮刷本三二二頁）、「學」を「學」（縮刷本三六一頁）、「聽」（同五九三頁、下字不明）、「稱佛具知根力」を「稱佛具知根力」（「稱佛」を上書訂記、縮刷本五九四頁）と変更するなどしている。これらには専修寺本との関連が多く見られる。

次に、訓読のためには、第一に、「爲」（縮刷本一八〇頁）の二点、「可令」（縮刷本三六九頁）の四点を補うなど、坂東本における省略返点の補いをしている。第二に、「云何」（縮刷本一七八頁）、「又復」（縮刷本三三二頁）のような合符の追加がある。第三に、「如来者・即・是・真实」（縮刷本一八〇頁）、「一者・欲暴」（縮刷本三三五頁）のように、坂東本に無い句切り点を追加し、あるいは読点を句切り点化した「是・世間」（縮刷本一七九頁）や「无有二也」（同二七九頁）の読点を削除した例も見受けられる。

最も注視すべきは、音に関する付加が多いという点である。右訓でいえば、「痛」を「痛イタムト」(縮刷本三六六頁)、「遂」を「遂ツイニ」(縮刷本三六七頁)、「彼」を「彼カシコニ」(縮刷本三六九頁)とするような箇所が多い。坂東本で送り仮名しかないものに対して、右のように、訓読あるいは音読するための補助として、積極的に字音を追加しているのである。さらに、坂東本の声点を保存しつつ、「大喜大捨」(縮刷本二八五頁、傍点の字に声点)、「檀波羅蜜」(縮刷本二八六頁、同前)など、新たに声点を付加している。ここには専修寺本に依らない追加も多く認められる。

朱による訓・点・音の書き入れは、正しく本文を訓読し、音読するために付加されたものと位置づけることができる。そのために諸異本を参照し、校訂や情報の集積を行っていたと考えられる。西本願寺本の書写では、『教行信証』をテキストとして「読む」対象とすることが目指され、声に出して読むことが意識されていた。

おわりに

様々な経典・論書・釈書等を蒐集・配列し、親鸞自身の解釈を施したのが『教行信証』である。坂東本を書写した西本願寺本には二つの特徴がある。第一に、坂東本を臨写して字体を模すことと、坂東本の文字・訓点・註記など情報をほぼ

忠実に保存することである。第二に、『教行信証』を読むため、解釈するための措置が施されていることであり、書写者自身によるものである。

西本願寺本の本文整理としては、引文を解釈するために改行・偈頌体・傍註・朱註が独自に施されたことが挙げられる。もう一つの本文整理として挙げられるのが、本文の墨書と朱を中心とする書き入れであり、字音を付して読むために声点・右左訓・字音註が書写・追加され、訓点に従って読むために返点・句切り点・読点・合符・字訓註・字義註が積極的に書写・追加されていた。

つまり、音読・訓読・読解の三つの「読む」要素を充実させたのが西本願寺本書写の実際であり、目的であった。坂東本の情報を基底に置きつつ、諸本の情報を集約して示すことで、坂東本との関係における親鸞からの継承性と、『教行信証』の展開史上におけるテキストとしての進展性が実現された。

西本願寺本書写当時は尊蓮書写本など親鸞の『教行信証』を写した本が幾つかあったと考えられるが、坂東本や「専修寺本の写本」等の『教行信証』諸本のみならず、引用経論釈の原典とも対照させながら、一度とは限らない校正がなされ、本文その他が整理されていた。このことで、西本願寺本は音訓に関する情報を付加し、読むための装置を備えるに

西本願寺本『教行信証』の本文整理（富島）

至った。

訓点や、音読に関する字音・声点が増加した事実からは、口伝との関係が浮かび上がる。西本願寺本は後に「伝授本」としての地位を帯びることになるが、そのための要件が西本願寺本書写時には既に備えられていた。時代性を考慮すれば、親鸞没後、直弟の時代、一四世紀以降盛んとなる延書本や註釈書の作成に先立つ時代の書写である。坂東本を継承しつつ、『教行信証』諸本と関連する典籍を多く参照して情報を集積することで、本文を「読む」ためのテキストとして成立したことに、西本願寺本書写の意義を見いだすことができる。

- 1 「西本願寺本の書誌について」（復刻本解説五三頁）および「西本願寺本『教行信証』の特色について」（縮刷本・下、九三八頁）。
- 2 重見一行『教行信証の研究——その文献学的考察——』（法蔵館、一九八一）一一九頁。
- 3 重見氏前掲書一二八頁。
- 4 山田龍城・福原亮巖「親鸞教学とその著作中の引用書」（『龍谷大学論集』三六五・三六六、一九六〇）によれば、『涅槃経』は三六文（子引八文）引用される。
- 5 『大般涅槃経要文』、『見聞集』所収の『涅槃経』など（いずれも真蹟集成に所収）。
- 6 富島信海「西本願寺本『教行信証』における註記の特徴について——坂東本との比較から——」（『印仏研』六二一一、二〇一三）。

〈略称〉

- 真蹟集成 『増補親鸞聖人真蹟集成』（法蔵館、二〇〇五）
 復刻本 『浄土真実教行証文類』復刻（西本願寺本）（浄土真宗本願寺派宗務所、二〇一二）
 縮刷本 『本願寺蔵顕浄土真実教行証文類縮刷本』上・下（『教行信証の研究』第三・四巻所収、浄土真宗本願寺派宗務所、二〇一二）
 専修寺本 『専修寺本顕浄土真実教行証文類』上・下（法蔵館、一九七五）

〈参考文献〉

- 重見一行『教行信証の研究——その文献学的考察——』（法蔵館、一九八一）
 山田龍城・福原亮巖「親鸞教学とその著作中の引用書」（『龍谷大学論集』三六五・三六六、一九六〇、二五七—三〇八頁）
 富島信海「西本願寺本『教行信証』における註記の特徴について——坂東本との比較から——」（『印仏研』六二一一、二〇一三、一四二—一四五頁）

〈キーワード〉 『教行信証』、西本願寺本、書誌

（龍谷大学大学院研究生）